

第7号

札幌くらぶ

発行／札幌くらぶ
 (財)札幌交響楽団内
 札幌市中央区中島公園1番15号
 (札幌コンサートホール内)
 電話 011-520-1771
 F A X 011-520-1772

尾高さん、大いに語る!!

98年度交流会は“尾高さんを囲む会”

98年11月9日、札幌のミュージック・アドバイザー、常任指揮者に就任された尾高忠明さんをお迎えして、98年度札幌くらぶ交流会「尾高さんを囲む会」がキタラ大会議室で開催されました。

これまでの交流会は、会員と楽団員の皆さんとの、文字通りの交流会として行われてきましたが、新しい常任指揮者をお迎えし、ぜひその生の声をお聞きしたいという会員の強い希望により、この会が実現しました。

当日は、今までにない70名もの会員の参加があり、上田事務局長の司会で終始なごやかに楽しい交流会となりました。

最初に山科会長より、「札幌くらぶの活動をより盛んにし、何とか定期会員を2000



人規模にして月2回の定期演奏会を実現したい」との挨拶があって会が始まりました。

続いて尾高さんが、ご馳走をいただき、お酒を飲みながらのリラックスした雰囲気の中、予定時間をオーバーして、ユーモアあふれる音楽談議を展開。会員一同、笑いころげ、うなづきながら巧みな話術に引き込まれました。(要旨は4ページ)

その後も、「日本人作曲家はとりあげるか」「オーケストラの配置は誰が決める」「団員のオーディションの実態は」などの質問に、休む間もなく答えられ、約1時間半、まさに「尾高オンステージ」を展開されました。

「落語以上のおもしろさ」「ここだけではもったいない」などの感想の中、参加者は「尾高節」を堪能した一夜でした。

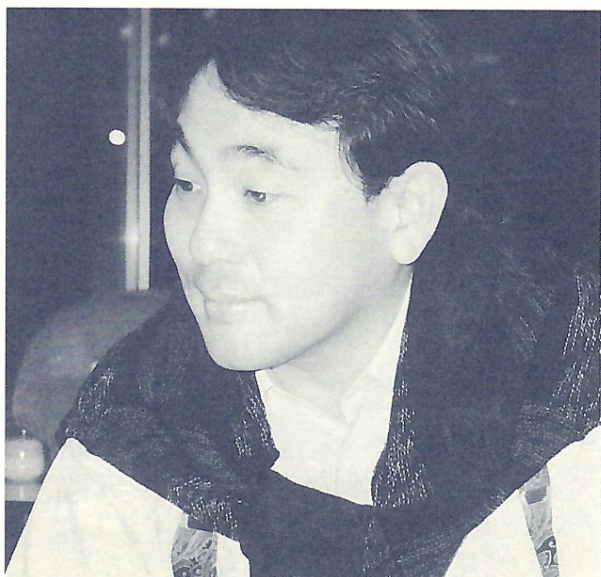
指揮者にきく

九州交響楽団常任指揮者

山下 一史さん

やました かずふみ

同年齢・国内デビュー
札幌に因縁を感じます!!



山下一史さんのプロフィール

1961年広島県生まれ。桐朋学園大学在学中の1982年、第17回民音指揮者コンクールで奨励賞を受賞。84年桐朋学園大学卒業後ベルリン芸術大学に留学。86年ニコライ・マルコ国際指揮者コンクールで優勝。同年9月、ベルリンフィルの「第9演奏会」で、急病のカラヤンに代わり同氏のアシスタントを務めていた山下氏が急遽ジーンズのまま指揮、好評を博して話題になった。

86年以降ザルツブルグ・フイングステン音楽祭で、カラヤンのスタンバイ指揮者として契約。87年デンマーク放送交響楽団など、デンマークのオーケストラを指揮して帰国し、広島交響楽団や札幌の「第9」などに出演。

88年第14回「若い芽のコンサート」でN響デビュー、同年9月から95年3月までN響副指揮者を務めた。93年秋から98年3月までスウェーデン・ヘルシンボリ交響楽団首席客演指揮者、96年4月からは九州交響楽団常任指揮者も務めており、期待と注目の指揮者。

1998年12月1日、札幌パークホテルで山下一史さんにお話をうかがいました。山下さんは12月3日に帯広での札幌定期演奏会の指揮のため芸術の森のアートホールで練習をしてホテルにお戻りになったところでした。

—— 札幌のリハーサル、お疲れさまでした。
山下 3日の帯広での定期演奏はブラームスの4番で、難しくまとめにくい曲なのですが、今日初めて練習したのに、最初から私の望んでいた音をととても良く出してくれて、スゴク嬉しかったのです。札幌は素晴らしいオーケストラだと思いました。今回のこの曲を、札幌の皆さんにお聞かせ出来ないのが残念です。

ジーンズで「第9」を指揮

—— 山下さんといえば、ベルリンフィルで、急病のカラヤンの代わりに「第9」を、しかもジーンズ姿で指揮、というのが有名ですが。
山下 1985年12月から、カラヤンのアシスタントをつとめておりました。86年9月にベルリンフィルの「第9」の演奏会がありました。1日目は土曜でカラヤンが指揮し、2日目は日曜で、午前11時からのマチネーで、楽屋裏で団員と雑談していたら、ステージマネージャーが血相を変えて飛んできて「カラヤンが急病だから、お前代わりに振ってくれ」と言われたのです。開演30分位前だったと思いますが、有無を言わずという感じでした。黒のジーンズとセーターという恰好でしたが、そのまま指揮台に上がり、代役を勤めたわけです。満25歳になったばかりの頃でした。

日本デビューは札幌の定期

—— 日本での指揮者としてのデビューは？
山下 札幌です。因縁めきますが、私が生まれた年は札幌が発足した年で、札幌と同じ年齢になるわけですが、何と、定期演奏会での「幻想交響曲」でした。12月でしたので、そのあと札幌と深川の「第9」も演奏しました。
—— 札幌とのお付き合いは、それ以来ズーッとということですね。
山下 そういことです。デビューしたての若い指揮者がオーケストラの定期演奏会を指揮するのは、まず考えられないことです。札幌の定期は年間11回しかないのに、その1回を、

本当に何のキャリアもない指揮者に任せようとしたのは、札幌の事務局の大英断だったと思います。この話が決まった時は、本当に嬉しかった。しかも、最初のコンサートは、お互いの信頼関係でうまくいきました。

オーケストラとホールと聴衆

話がちょっとそれますが、オーケストラは自分のコンサートホールで練習し、本番の演奏をするのがとても大切なことです。ご承知のようにヨーロッパでは当たり前のことで、どんな田舎に行ってもそうですが、そうすることによってオーケストラが自分自身の音を作ることが出来るのです。

ベルリンフィルの団員は、世界最高のホールで演奏をしていると思っていますけれど、「どこのホールが一番印象に残りましたか」と、これは愚問ですが、聞いたことがありました。団員は、ニヤッと笑って「僕たちは比べられない。自分たちが一番演奏しやすく、そして一番力を発揮出来るのは、ベルリンフィルのホールだ」と言っていました。

ベルリンの人は団員の顔を知っていて、道で会えば挨拶をするまでになっています。日本でもそのようになったとき、オケが根づいたと言えるので、その可能性は地方のオケにあると思います。前に札幌と稚内に行ったとき、高校生からおじいちゃんおばあちゃんまで、皆が楽しみにして待っていてくれましたが、演奏家にとって、これは非常に幸せなことなのです。

チェロから指揮者へ

—— 指揮者になりたいと思ったのはいつの頃ですか。

山下 物心がついたころ。多分、「N響アワー」を見たのでしょうか、後から一人でノコノコ楽器も持たずに出てきて、一人で挨拶して、終わると一人でサッサと入っていくのを、カッコイイなと思ったのでしょうか。

ラッキーなことに、桐朋学園の「子供のための音楽教室」が広島に出来ましたので、最初は、斎藤秀雄先生についてチェロを始めたのです。その当時、私の周りにはチェロのうまい凄い人がいっぱいいました。3か月か4か月に一度、斎藤先生が広島に来て指導するのですが、私の左利きを直すため、円光寺さんに面倒を見てもらい、その縁で尾高先生に出会いました。最初の先生は円光寺さんです

が、不思議なご縁で、今、お二人とも札幌の指揮者になっておられる。今でこそ「仏の円光寺」と言われておりますが、そのころはずいぶん厳しく教わりました。

好条件に恵まれたキタラ

—— 札幌のコンサートホールはいかがですか？

山下 すごく良いですね。音響設計の豊田さんは



同郷の広島出身の人です。サントリーホールなど、たくさんホールを手がけて、ノウハウが確立した後でしたので、札幌は良いときに作ったと思います。これがもっと後になると、お金がウンとかかると思います。

出来た当初から音が良い理由の一つは、札幌が湿気の少ない風土だからだと思います。出会いのタイミングも、気候も、良い条件で作ったと思います。

演奏家は、お客様がいればどこへでも行きますが、良いホールがあって、いい響きでやりたいものなのです。私も、好きなりヒャルト＝シュトラウスを、このホールで心ゆくまで振ってみたいものです。

このコンサートホールは、お金には代えられない札幌の誇るべき財産、シンボルです。日本に幾つもない立派なホールで、札幌抜きには考えられないものです。

札幌を盛り上げ、応援して頂くよう、私としても「札幌くらぶ」にお願いします。

札幌に着いた翌日の朝からの練習の後でお疲れのところ、お人柄か、若さか、あるいは好調な練習で心が弾まれたのか、とても元気にお話し下さいました。なお、録音の渡辺悦子さん、写真の田山登代美さんには、進行も助けていただきました。

(インタビュー 石川政治)

98年度交流会より

1 ページで報告しました交流会での、尾高さんのお話の要旨をお伝えいたします。紙面の都合ですべてをお伝えできないのが残念です。

「サッキョウ」の「オタカ」です

今晚は、どうぞ、飲みながら、食べながらいきましょう。

「札幌」というのは、実にいい語感ですよね。全国に「～響」というのがたくさんありますが、いい感じなのが少ない。「札幌」というのは語感がすばらしいと思うんです。そして、市民に愛されている。昔、真駒内の青少年センターで練習して、タクシーで「真駒内の駅まで」と言ったら「あっ、札幌の方ですか？」と聞かれましたが、このように聞かれるのは札幌しかないんですよ。

僕の名前は言いにくいですよ。僕は「オタカ」忠明なんです。戸籍上は「オダカ」で、そのほうが言いやすいんですけど、僕の父が、昔、外国に行って指揮をした時に、オーストリアの人に「濁るのは感じ悪い」って言われて、「タ」になっちゃったんです。本当は「オダカ」ですが、音楽上は「オタカ」でやらせていただきます。

札幌との出会い

札幌には、僕が民音のコンクールに入っただけでなく、23の頃です。僕は、プロのオケを振るのが怖くて、嫌だと思ったんですが、練習に行ったら、雪の日で、振ろうと思ってふっと見たら、チェロのトップの方が長靴だったんですね。何か、すごくほっとしまして、それでうまくいきました。

その後、岩城宏之先生の頃に「お前、ぜひ一緒にやろう」と言われまして、81年から86年までご一緒させていただきました。あの5年間は一生忘れられない。僕自身充実していましたし、札幌の楽員さんと家族のように暮らしていました。その後、イギリスに行っても、一番気になったのは、日本のこと、そして札幌のことでした。

お客様あつての音楽会

僕は、音楽会というのは、必ず、お客様あつてのものだと思っています。そして、こう申し上げては失礼ですけど、お客様の質が悪いと絶対にいい演奏会にはならないんですね。ロンドンで毎夏世界中の有名なオーケストラが集まって、6000人の聴衆を前

に、70回近くの演奏会が行われていますが、僕は今までに20何回演奏しましたが、自分で失敗だったと思うことが1回もありません。それは、お客様の励ましや感動の気持ち、僕たち演奏家にじかに伝わって、のせられたというか、終わってみればみんないい演奏になっているっていう訳です。だから、演奏というのは演奏家だけではできない。いいホールと、演奏と、そして何よりもお客様が大切だと、これ今日だけでなく、本当にいつも言ってるんです。



2回の定期を

先程、会長のお話で、「2回の定期」ということがございましたが、僕もそれを願っています。なぜ2回がいいかという、たとえば、明後日にやるウォルトンの1番は、ものすごく激しく難しい曲です。昨日初めて練習しまして、びっくりしました。楽員さんがあそこまで勉強してくれてか。それでも大変な曲なんです。ああいう曲をやる時に、1回よりは2回のほうが、楽員さんの体にしみつくというか、次の時の財産になるんです。また、演奏というのは毎回どうしても違います。2回やることでよりよい演奏を追求できる訳です。

札幌の聴衆は自然な反応

日本の音楽会もずいぶん変わったなと思います。東京を例にとりますと、異常に詳しい人達が集まる時と、まるで分かっていない人達が集まる時と、本当に読めません。お客様は増えたけど、質はというと、いろいろ問題があります。たとえば、あの、曲が終わった後、自然に聴いていけば、何かこう、余韻のようなものがありますよね。それを最後の音と同時に「ブラボー」ってやって、壊されてしまうんです。自然に聴いていけば自然な拍手になると思うんです。

札幌の定期の皆さんはどうかというと、ナチュラルというか、その自然の状態にとっても近いんです。お世辞ではなく、それがとても嬉しいと思います。

音楽空間を無駄にしない

旧東ドイツや、オーストリアで返券システムの充実ぶりに感心させられました。「オーケストラにお金を払ったのだからいいというのではない、音楽空間を無駄にしない」ということが徹底しています。

札幌にも返券システムがありますが、より一層充実させていくことが大切だと思います。

話が長くて、申し訳ありませんでした。

(文責 佐藤良次)

札幌物語 VIII

楽員会 (2)



札幌が創立して間もなく、親睦を目的として誕生した札幌楽員会は、よく遊びよく遊びました。

12月には忘年会、1月には新年会、春は楽団員や家族がそろってずらん狩りに、夏には積丹海岸などへ海水浴に、それぞれ貸し切りバスを手配して出かけました。最初は、楽団員と家族だけが対象でしたが、だんだんと楽団員にファンが出来始め、会員の了解を得てその人達も仲間に入り、多いときはバス2台が満席で行ったこともありました。

まだ知名度の低かった札幌も、芸術の秋だけは忙しく、観楓会だけは一度も実現しませんでした。

練習場は Kitara の近くに姿を変えて今もある中島児童会館でした。冬になると目の前の池はスケート・リンクになり、その先にあった野球場は歩くスキー場になりました。昼休みになると、それぞれのリンクにいそいそと通う楽団員は大勢いました。

札幌冬季オリンピック大会にはまだ遠い時代でしたが、ウインター・スポーツ、特にゲレンデ・スキーは盛んになっていました。冬のレクリエーションも度々話題に上ったのですが、怪我で演奏会に出演できなくなるのを怖れて、楽員会としてはスキー遠足を主催しなかったの

す。

当時の楽団員の給料は安く、ボーナスなどの手当でも無かったために、家庭を持っている人たちの暮らしはとて厳しかったのです。楽団員は生活のため以外に、音楽の勉強のために楽譜やレコードの購入もしなければならぬのです。

もっと大変なのは、自分の楽器の維持や更新でした。弦楽器の場合は弦の交換、弓の毛の張り替え、定期的な楽器の調整、そして楽器保険の支払いなどのために年間かなりな出費が必要です。管楽器の場合は、楽器そのものが消耗品なので定期的買い替えをしなければならず、月賦で購入しても支払いは大変でした。内助の功なくして成り立たない職業でした。

そんな中で、家族まで一緒にこれだけ充実したレクリエーションを計画出来たのは、スポンサーのお陰でした。スポンサーは初代理事長阿部謙夫氏 (HBC社長)、初代副理事長島本融氏 (道銀頭取)、初代常任指揮者荒谷正雄氏でした。荒谷氏からは予めいただいていたのですが、事務局長の口添えで、毎度HBCの社長室や道銀の頭取室へお願いに参上するのも、その時の楽員会長の大事な役目でした。

(竹津宜男)

オーケストラなんでもQ&A

Q. オーケストラの演奏が始まる前に、音合わせをする時、いつもオーボエの音に合わせていますがどうしてオーボエなのですか。

A. 昔のオーボエは楽器として非常に不完全で、音も不安定だったのです。オーボエ奏者のコンディションでその時のオーケストラの調子が決まったようです。そのため、オーボエの音程にオーケストラ全体が合わせる必要がありました。それが慣習となって、現在に至っているわけです。

ちなみに、最初に出すA(ラ)の音は、人間の産声と同じ高さと言われています。

Q. 最近、よく見たり聞いたりする、“ソロ・コンサートマスター”って何ですか。

A. 「ソロ・～」というのは、コンサートマスターに限らず、各パートの首席にもソロ首席があります。いずれもオーケストラの曲の中のソロの部分をごさすだけではなく、そのオーケストラで、協奏曲のソロも回数で契約している人たちです。

その中で、第一ヴァイオリンの首席奏者、すなわちコンサートマスターでソロ契約をしている人を“ソロ・コンサートマスター”と称しているわけです。

PLAYER'S TALK

札幌交響楽団 首席オーボエ奏者

いわさき ひろまさ
岩崎 弘昌 さん

難しいオーボエを始めるきっかけは

僕は滝川生まれです。中学校のクラブで打楽器、クラリネット、サクソなどをやり、中2の時オーボエの音階が吹けた。特に難しいとは思わずに。

松浦先生の指導で将来音大ということになり、受験をめざして、札幌の高橋志郎さんについた。それまで音大のことは知らなかったのです。

東京の音大に入ってから、先生にでもなろうと思ひ、オーケストラは意識していませんでした。学生エキストラで東京のオケでアルバイトをしているうちに、オーケストラの姿が見えてきたのです。

岩崎さんにとってのドイツ研修は

札幌に入ってから10年目の1987年、それまで行きたいと思っていたドイツに、ロータリー・クラブの奨学金を受け、1年間、研修員としてハンブルグ国立歌劇場管弦楽団に参りまして、ライナー・ヘルヴィッヒにつきました。研修員ですが、労働ビザが下りなかったのです。でも、放送局とか、教会での演奏に参加させてもらい、良い経験になりました。

滞在中は、ロータリー・クラブの仲間とのつき合い、電話やパーティ、ヨット遊びや映画などを通してドイツ語に親しみ、帰る時には喧嘩するくらいコトバの壁を乗り越えていました。

1年間の暮らしは、色々な面で考える材料を豊富に与えられたように思います。

札幌に帰って、お感じになったことは

僕が経験したあちらのオケでは、フォルティッシモってこんなに柔らかくて小さくていいのかな、と思うようないつも心地よい音なんです。ただし、録音して聴いてみると、私たちがレコードで聴いているように、パーンとした音なのです。レコードだけを聴いて参考にすると、全体的に荒っぽい音になってしまう。

ドイツでは少し攻撃的だとかオーバーだとかいわ



れる表現も札幌では必要なのかな、というようなギャップもありました。

札幌がこれから国際的に飛躍するためにも、こうした違いを体験する若い人たちがふえたら、と思います。

最近感じていらっしゃることは

演奏する人も聴く人も、音楽の偉大なことを本質的に感ずる生活ができたら、と思います。それから才能のある、しかし経済的に東京などへ出るには難しい若い人たちのために、ここに音楽大学がほしいですね。立地条件を備えているのですから。

「札幌くらぶ」ができて、僕たちのことを分かろうとしている、応援してくれようとしているって感じた時、とても嬉しかった。今まで考えられなかったことですものね。心から感謝しています。

札幌交響楽団 首席チェロ奏者

さくらば しげき
桜庭 茂樹 さん

ヨーロッパからなぜ札幌へですか

僕は仙台生まれの東京育ちで、新日フィルの首席を2年勤めた後、スイス（スイス・ロマンダ管弦楽団）で2年、モナコ（モンテカルロ・フィル）で14年過ごしました。札幌はヨーロッパにとっても良く似ていると思います。街が広く、住んでいる人たちが親切で明るい街という印象があります。楽器をかかえて地下鉄とバスを乗り継いで、練習会場の芸術の森へでかける札幌での生活は、落ち着いて音楽に取り組み気持ちになる街だと思います。大きな理由はやはり「キタラ」ですね。このホールでの演奏で印象が良かったことでしょうか。（「キタラ」がオープンした年、桜庭さんはモナコから来札して札幌の演

奏会に客演で出演し、翌98年4月に首席として入団なさいました)

入団後の札幌の印象はいかがでしたか

忙しいスケジュールですね。でもオーケストラはどんなコンサートにも真面目に取り組んでいます。難しい曲が多く、皆よく勉強している。もっと、いい音楽をやりたい、と意欲的だしポテンシャル(可能性)を感じさせるオーケストラですね。意欲との



距離がうまるような、内容を充実させていかれたらと思います。年末の第九もいいけれど、オペレッタなども楽しくできたら、と思うし、子供たちにいい音楽を聴かせるチャンスも大切にしたいですね。

オーケストラの中のチェロの魅力について

緑の下の力持ちにとどまらず、朗々としたメロディも弾けるしバロックの通奏低音もできる、範囲が広くてとても深い。「いいオーケストラは低音から鳴る」といわれる意味からも支えとなる楽器を演奏することに魅力を感じます。

これまで思い出に残っていることなど

僕はフランス語圏が長かったのですが、モナコなどで「カルメン」をすると、本当にみんな嬉々として演奏しだすんですね。ああ、これが血の中で感ずることなんだ、と強く思いましたね。カラヤンとベルリンフィルがモナコに来て「ボレロ」を演奏した時は全然その血を感じさせなかった。逆にフランス人がベートーベンを演奏しても厳格さが出ない。その点、日本人は非常に器用ですね。フランスもの、ドイツやスペインのものも解るといふ順応性があると思いますね。もっと掘り下げていけば、西洋音楽の源に迫った演奏になるのではないのでしょうか。

札幌で感じていらっしゃることを

5月の定期、尾高さん指揮の「英雄の生涯」は、とても印象的でした。特にコンサート・マスターのニキティンさんのソロが素晴らしかった。その素晴らしさにお客様の反応があまり感じられなかったのは意外でした。札幌は明るい街ですが、もっと気持ちをオープンに表してもいいのではないのでしょうか。そうすれば、演奏する人の励みにもなるでしょう。

from 「札幌くらぶ」

「尾高さんを囲む会」には多くの会員の参加を得て、尾高さんには、12年ぶりに帰ってこられた札幌への想い、そして私達「札幌くらぶ」の活動の大切さについても存分に語っていただきました。尾高さんのお人柄にふれ、音楽の楽しさを、また一つ発見できたひとときでもありました。

その中で、英国をはじめとする外国のオーケストラでは、リスナーの獲得・発掘活動に熱心に取り組んでいることや、その具体例も話されました。

会報6号でもお知らせしました、4月17日開催の「札幌くらぶ主催コンサート」の内容につきましても、尾高さんのお話を参考に、過日実行委員会を開き、演奏会のコンセプトを「札幌とあそぼう」とすることに決定しました。

演奏曲目の選定につきましては、楽団員の方々ともご相談のうえ決定いたしますが、演奏会の概要としては、第1部は「オーケストラの鉄人—超絶技巧の数々—」と題して、札幌楽団員の実力を存分に堪能させていただき、第2部は「札幌とあそぼう」をテーマに、リスナー参加の楽しい演奏とのイメージで企画中です。

チケットの価格も低廉とし、会員の皆様には2~3枚程度のチケットの販売にご協力願いたいと思っております。それが、札幌ファンを一人でも増やす活動となることを願うのであります。具体的なお願いは、個別に郵送させていただきますので、よろしくお願い申し上げます。

末筆ながら、新年のご挨拶を申し上げ、コンサート主催という画期的な本年が、当くらぶの飛躍的な発展の年となりますよう、心から願っております。

(実行委員長 上田文雄)

FAN NETWORK

札幌とのかかわり

過去、聴きに行った演奏会のプログラムも捨てずにいたかなりの数になった。その中に私の宝物といえる一枚のプログラムがある。それは今のような立派なアート印刷でなく、二つ折のザラ紙で作られたものだ。今から27年も前の、昭和47年10月19日に室蘭文化センターで開催された、札幌室蘭公演の時のプログラムである。今は亡きペーター＝シュバルツさんのサインが入っている。当日、練習を終わって疲れていたシュバルツさんに無理にサインをお願いしたものである。

当時、新日鉄室蘭に在職していた私は、余暇にボランティアで室蘭企業間文化推進事業を手伝っていた。2月の年度計画会議で私が出した札幌公演がすんなりと承認され、しかも私が公演実行責任者に指名されてしまったのだった。

何回か出札し、札幌事務局と打ち合わせを行い、10月の室蘭での演奏会を決定した。

9月早々入場券を売り出したがさっぱりで、公演近くになっても売れ行きは伸びず、このままでは赤字公演になるが、この責任をどうするかと頭を抱えていたのを今でも鮮明に覚えている。

神風が吹いたのか、いつものパターンだったのか公演間近になってから券が売れ出し、一安心したものである。当日の曲目はベートーベンの交響曲第7番と、ショパンのピアノコンチェルト第1番で、ピアニストは遠藤郁子となっている。私は裏方ばかりで当日の演奏会の記憶はまったく無い。

当時私も30代後半でまだ馬力も十分あった。札幌も創立10年そこそこで、これから充実の時期であるといったように思えた。社会構造もある意味で弾力があり夢があった。

その後、念願の「第9」に出たりして札幌との思い出はつきない。当時のような熱心な応援はできないが、今後ともささやかに札幌を支えて行きたい。

(谷崎雅英)

特集 交流会参加の皆さんの声から

新しい札幌の指揮者尾高さんをお迎えした節目、これからの札幌への期待も大変ふくらみました。良い交流会でした。期待以上の気分で過ごしました。今後の札幌の演奏会が20倍楽しくなりそうです。

(江本久枝)

尾高さんの大変素晴らしいお話を聞くことができ、本当に「札幌くらぶの会員でよかった」と思いました。もっと多くの方に聞いていただきたいと思えます。くらぶ員をもっと増やしましょう。会報で尾高さんの「小話特集」をしませんか。(永田康)

非常にゼイタクな会で、本当に感動しました。次回には家族や友人をつれてきたいと思えます。

(安井俊博)

定期演奏会のプログラムに、次の演奏会の曲目解説(青沢唯夫さん)は載っていて楽しいのですが、その曲目を選んだ理由など一言、触れてもらってはどうでしょうか(指揮者や楽員から)。今日、尾高さんの話を聞いて思いつきました。(故 田中源一氏)

尾高さんの人柄と見識を、楽しく知ることができた、最高の会だったと思う。尾高さん有り難う。

(佐々木甫)

楽しかった。演奏会で、尾高さんの地声を聴衆に聞かせたい。

(畑山齊)

尾高さん ありがとうございます。



編集後記

新年明けましておめでとうございます。新たな年の、皆様のお幸せをお祈りいたします。

本号は、98年度の交流会をメインに編集いたしました。当日、尾高さんは、今日は言えないが、来年の定期のプログラムには期待してほしい、と言っておられました。そのプログラムが

発表になりましたが、なるほど斬新なもので、尾高色が、札幌を一段と成長させてくれることでしょう。

なお、交流会の感想をお寄せ下さった、札幌前専務理事田中源一氏は、2週間後に急逝されました。ご冥福をお祈りします。(佐藤良次)

次号の「札幌くらぶ」は4月発行の予定です。